

劉向に於ける古文學的性格について

著者	鎌田 正
雑誌名	漢文學會々報
巻	15
ページ	7-13
発行年	1954-06-25
URL	http://doi.org/10.15068/00148035

劉向に於ける古文學的性格について

鎌田正

一

劉向は昭帝の元鳳二年(B.C. 79)に生れ、成帝の綏和元年(B.C. 8)、七十二歳をもつて歿した。彼の時代はまさに今文學の全盛時代であり、彼も亦穀梁學の大家として、かの宣帝の甘露三年(B.C. 17)には、石渠閣の會議に活躍して穀梁立學の功を奏し、成帝の河平三年(B.C. 28)以後は、祕府の典籍を領校する事業に従つた。実に前漢末期に於ける蔚然たる今文學者である。然るに彼の歿した翌々年の建平元年には、その子劉歆が古文立學の大運動を起し、今文學の偏見を攻撃し、官學の門戸解放を要請するに至つた。まさに學界に於ける一大旋風ともいふべき大事件であるが、劉向の如き今文學者から劉歆の如き古文學者の出たことは、師法や家學の傳統が尊重された当年に於ては、極めて注目すべき重大なことがらといはなければならない。そこでこの間の事情、即ち劉向から劉歆への展開に於ける學的關連について、劉向の學術、特にその春秋學を通して論究しようとするのが、この論文の目的である。

二

漢書の五行志を見ると、公羊家董仲舒・穀梁家劉向・左伝家劉歆の三家の春秋災異説が、洪範の五行伝の構成のもとに集められてゐるが、これについて五行志は

漢興、承秦滅學之後、景武之世、董仲舒治公羊春秋、始推陰陽爲儒者宗、宣元之後、劉向治穀梁春秋、數其禍福、傳以

洪範、與仲舒錯、至向子歆、治左氏傳、其春秋意、亦已乖矣、言五行傳、又頗不同、是以擬仲舒別向歆。

と、述べてゐる。五行志が、三家の所説の相違を陰陽説と五行伝説とに求めてゐるのは、確かに三家の特質をとらへたものであり、更に仲舒の説を取りあげて向・歆の説と區別すると述べてゐるのは、五行志といふ性格から見ても當然のことといふべきである。然しながら五行志に見える三家の所説を個々に比較して見ると、董・向二家の本質的な差異を認めることは困難であり、仲舒に対して向・歆を対立せしめるよりは、むしろ仲舒・劉向に対して劉歆を対立せしめることが妥當のやうに見られる。董・向二家の所説の相違するものについて見ても、それらは占驗の事象に若干の相違が見られただけであつて所説の傾向が同一であり、或は「董仲舒・劉向以爲へらく」として両者の説を總括して述べてゐる所が多く見られるし、或は「略ほ董仲舒の説に従ふ」と述べて、劉向の所説が董仲舒の説を踏襲してゐることを明かにしてゐる所が少くない。このことは、穀梁家としての劉向の學説を究明する上に於て極めて重要なことである。端的に言ふならば、穀梁家としての劉向の春秋災異説は、公羊家としての董仲舒のそれとさして異なるものではなく、公羊學に対して穀梁學としての本質的な特色を示さなかつたといふことになる。試みに劉向の所説の中で、明かに穀梁の伝文を引用したと見るべきものを拾つて見るに、僅かに次の三条を数へるに過ぎない。

(一) 莊公十八年三月、日有食之、穀梁傳曰、不言日不言朔、夜食

……劉向以爲、夜食者、陰因日明之衰而奪其光、象周天子不明、齊桓將奪其威、專會諸侯而行伯道、其後遂九合諸侯、天子使世子會之、此其効也。(五行志)

(二) 僖公十五年九月己卯晦、震夷伯之廟、劉向以爲、晦、暝也、震、雷也、夷伯世大夫、正晝雷、其廟獨冥、天戒若曰、勿使大夫世官、將專事暝晦、明年公子季友卒、果世官、政在季氏、至成公十六年六月甲午晦、正晝皆暝、陰爲陽、臣制君也、成公不寤、其冬季氏殺公子偃、季氏萌於僖公、大於成公、此其應也。(五行志)

○傍線の部分は、穀梁伝の文。

(三) 文公三年秋、雨蚤于宋、劉向以爲、先是、宋殺大夫而無罪、有暴虐賦斂之應、穀梁傳曰、上下皆合、言甚。(五行志)

穀梁の伝文を引用すると言つても、僅かに其の片言隻句を用ひたに過ぎないし、更には穀梁の伝文と異なる説を立ててゐる所もあり、(五行志上、成公三年)或は又公羊の伝文を引いて説を為す所も見える。(二月甲子新宮災の条)斯く考察して来ると、劉向の災異説は、穀梁家としての特色を示したものでなく、むしろ公羊家董仲舒の所説に倣ふものといふべきである。

斯くの如く、劉向の災異説が董仲舒の所説を踏襲してゐるといふことは、穀梁の学を起すに當つて、時の顯学たる公羊学の説に倣つたものと思はれるが、彼の災異説に於て特に注目すべきことは、彼が災異説を洪範の五行伝に依つて理論的に構成し、具体的な事象を豊富な資料によつて実証しようとしたことである。元來、漢書五行志に見える彼の災異説は、彼の著した洪範五行伝論(漢書の芸文志には劉向五行伝記とある)に従つたものと思はれるが、この書は、漢書の本伝にも言ふ如く、彼が祕府の典籍を領校する命を拜した後に作られたもので、上古より秦漢に

至るまでの幾多の符瑞災異の記を集め、具体的な行事と禍福占驗とを五行伝の構成のもとに排列したものである。しかして彼の五行伝は、五行志(中之上)にいふ如く、夏侯始昌以来のものであるから、要するに今文尚書家の五行伝説を以て、董仲舒以来の春秋災異説を合理的に説明しようとしたものであり、しかもその事象の資料を春秋の一經とか一伝に限定することなく、広く他の典籍に求め、豊富な資料に依つて実証しようとしたものである。この事は更に彼が祕府の典籍を領校する命を拜した賜であつて、劉向の学問に一転機をもたらしたものは、この祕書領校の事業でなかつたかと思はれる。この事については、後に再び論及する積りであるが、劉向の学問における合理主義的・実証主義的な性格は、特に注目すべきことといはなければならぬ。

三

再び劉向の春秋学について考察して見るに、彼の春秋学は穀梁家としてよりは、むしろ公羊家董仲舒的な色彩が濃厚であつたことは、単に五行志に於て見られるばかりでなく、漢書の本伝に見える封事や、その著説苑・新序等に於ても一層明瞭に見られる。元來彼は学問の幅が広く、古今の典籍を豊富に読んで広く引用してをり、且つ公羊・穀梁の二伝が内容的に一致してをる点もあるので、直ちにその典拠を明かにし難いものもあるが、特にその明瞭なものについて言へば、穀梁の伝文を引用して立説するものは、公羊に比して遙かに少いといふことは蔽ふべからざる事実である。今、明かに穀梁の伝文を引用するものについて示せば、

- (一) 春秋曰、五帝不告誓、信厚也。(新序節士)
- (二) 衛侯朔召不往、齊逆命而助朔。(漢書本傳)
- (三) 魯宣公者、魯文公之弟也、……宣公與之祿、則曰、我足矣、何以兄之食爲哉、織履而食、終身不食宣公之食、其仁恩厚矣、

其守節固矣、故春秋美而貴之。(新序節士)

(四) 許悼公疾、癘、飲藥毒而死、太子止自責、不嘗藥、不立其位、與其弟緯、專哭泣、啜粥、噉不粒、痛己之不嘗藥、未逾年而死、故春秋義之。(新序節士)

の如きものがある。(一)は穀梁、隱公八年、(二)は桓公十六年、(三)は宣公十七年、(四)は昭公十九年の伝文に従ふものである。これに対して、公羊伝を引用し、或はそれに従つて立説するものが甚だ多い。

(一) 春秋曰、庚戌天王崩、傳曰、天王何以不書葬、天子記崩不書葬、必其時也、諸侯記卒記葬、有天子在、不必其時也。(說苑脩文)
— 公羊、隱公三年の伝文。

(二) 周大夫祭伯乖離不和、出奔於魯、而春秋爲諱、不言來奔、傷其禍殃自此始也、是後尹氏世卿而專恣。(漢書本傳)
— 1は公羊、隱公元年、2は隱公三年の伝文による。

(三) 今隱公貪利而身漁濟上。(說苑貴德)
— 公羊、隱公五年、春公觀魚于棠の伝文による。

(四) 傳曰、自陝以東者、周公主之、自陝以西者、召公主之。(說苑貴德)
— 公羊、隱公五年の伝文。

(五) 宋閔公臣長萬、以勇力聞、萬與魯戰、師敗、爲魯所獲……萬臂擊仇牧而殺之、齒著於門闕、仇牧可謂不畏彊禦矣、越君之難、顧不旋踵。(新序義勇)
— 公羊、莊公十二年の伝文。

(六) 昔者齊桓公與魯桓公爲柯之盟、魯大夫曹劌謂莊公曰、齊之侵魯、至於城下、城壞壓境、君不圖與、莊公曰、嘻、寡人之生、不若死……功次三王、爲五伯長、本信起乎柯之盟也。(新序雜事四)
— 公羊、莊公十三年の伝文による。

(七) 夏公如齊逆女、何以書、親迎禮也。(說苑脩文)
— 公羊、莊公二十四年の伝文。

(八) 昔曹羈三諫、曹君不聽而去、春秋序義、雖俱賢、而曹羈合

禮。(說苑正諫)
— 公羊、莊公二十四年の伝文による。

(九) 故傳曰、患之起、必自此始也。(說苑尊賢)
— 公羊、僖公二十六年の伝文。

(十) 是以春秋先京師而後諸夏、先諸夏而後夷狄。(說苑指武)
— 公羊、成公十五年の伝文による。

(十一) 吳王壽夢有四子、長曰謁、次曰餘祭、次曰夷昧、次曰季札、號曰延陵季子、最賢……以位讓季子曰、爾殺吾君、吾受爾國、則吾與爾、爲共篡也……君子以其不殺爲仁、以其不取國爲義。(說苑至公)
— 公羊、襄公二十九年の伝文。

(十二) 是以春秋賢季子而尊貴之也。(新序節士)
— 同右。

(十三) 春秋曰、天王入于成周、傳曰、成周者何、東周也。(說苑脩文)
— 公羊、昭公二十六年の伝文。

(十四) 故睹麟而泣、哀道不行、德澤不洽、於是、退作春秋、明素王之道、以示後人。(說苑貴德)
— 1は公羊、哀公十四年の伝文による、2は漢書、董仲舒傳の文に見える。

以上の例証に依つて、劉向の春秋学は、多く公羊に基いてゐることが明かとなつたが、特に右の(四)の例は、実に春秋制作の大義に関するもので、それが公羊伝並びに董仲舒の説に従つてゐることは、彼の春秋学としては特に注目しなければならないことである。

次に、彼の春秋学と董仲舒との關係を考察するに、彼は董仲舒の公羊説に従ふ所が甚だ多く、それらは何れも公羊学の大義に関するものである。前に述べた素王説を始めとし、說苑の尊賢篇には「故共惟五始之要云々」と述べて、春秋五始の説を述べ、漢書の本伝には、王者必通三統、明天命所授者博、非獨一姓也。

と、通三統の説を述べ、或は說苑の脩文篇に
商者常也、常者質、質主天、夏者大也、大者文也、主地、故王者一商一夏、再而復者也、正色三而復者也。

と、文質・三正の思想を論じてゐるが、これらは董仲舒が改制思想として最も鼓吹した三統説や文質説にわたる問題で、春秋繁露の三代改制質文篇に詳説されてゐる。又、春秋の価値を強調して、

故曰、有_レ國者、不_レ可_レ以_レ不_レ學_レ春秋、此之謂也。(說苑君道)

公扈子曰、有_レ國者、不_レ可_レ以_レ不_レ學_レ春秋、……春秋、國之鑑也、春秋之中、弑君三十六、亡國五十二、諸侯奔走不得_レ保_レ其社稷_レ者甚多。(說苑建本)

と、述べてゐる所は、春秋繁露の俞序篇や、史記の大史公自序に「余董生に聞く」と称して、春秋の大義を説く条に見える。劉向が董氏の公羊説を引用するのは、右の例に止まらず、更に董氏の全文をそのまま引用する所もある。その全文の引用は今省略するが、説苑の弁物篇の「夫水旱俱_レ天下_レ云云」の一節及び奉使篇の冒頭たる「春秋之辭有_レ相反者四_レ云云」の一節は、共に繁露の精華篇の文と殆んど一致するものである。斯くの如く、劉向が董氏の公羊説を引用して立説してゐるのは、彼が公羊学に精通してゐたことを立証するもので、従つて鄭玄の六芸論に、劉向が公羊家顔安樂の門人であることを述べてゐるのは、(公羊序疏参照)恐らく事実を伝へたものでないかと思はれる。して見ると、彼は穀梁家と称されるよりは、むしろ公羊家と称されるのが適當であるといふべきである。彼が穀梁を学び穀梁のために石渠閣の會議で活躍したのは、実は朝命に依るものであつて、これを以て穀梁家と目するのは、必ずしもその當を得たものではない。

四

劉向が穀梁家としてよりはむしろ公羊家であつたといふことは、彼が今文学者としての色彩をより濃厚にするものであるが、以下特に問題として論究したいことは、劉向と左伝との關係についてである。

漢書の劉歆伝によれば、劉歆は左伝に精通し、父劉向と三伝の優劣について論議し、劉向は歆の説を論駁できなかつたが、穀梁の義を持

して譲らなかつたといはれる。劉向はなぜ歆の説を論駁し得なかつたのであらうか。理論的には歆の説を肯定しながらも、それに従ふことを潔しとしなかつたといふのは、劉向の学問の性格に、二つの相反するものがあつて、未だ対立矛盾の域を脱却することができなかつたことを物語るやうに思はれる。或は無意識の中に新しい性格が芽生えてゐたといふべきであるかも知れないし、子の劉歆は父の新しい性格をもつて、父の古い性格を攻撃したものであるとも考へられる。論究すべき問題はここにある。

既に述べた如く、劉向が祕府の書を領校する命を拜したのは、成帝の河平三年のことで、劉歆も亦同時に命を拜してゐるから、(漢書劉歆伝参照)劉歆が祕府の古文春秋左氏伝を見てゐるならば、当然劉向も亦見てゐるに相違なく、従つてこれ以後に著はされた洪範五行伝論や列女伝・説苑・新序等の書に左伝が引用されてゐるのは当然のことと言はなければならぬ。章炳麟が「劉子政左氏説」の一篇を著はし、説苑・新序・列女伝に引用されてゐる左伝やそれに関する所説を精しく考証して、或は古文左氏伝の面目を見ることができると言ひ、或は劉向の加へた左伝の訓詁の姿を見ることができると言つてゐるのは、まさに精審なる学識と言はなければならぬ。然しながら彼の書の引用文が、左伝と一致し或はそれに類似するといふことでもつて、直ちにその引用文が左伝であると断定することはできない。そこで再び漢書の五行志について調査してみると、劉向の所説の中に、実は左伝のみに存する災異について述べたものが九条存する。このことは特に注目すべき重要なことであるから、繁を厭はずに全文を載せる。

(一) 左氏傳曰、莊公八年、齊襄公田_三于貝丘_一、見_レ豕_一、從者曰、公子彭生也、公怒曰、射_レ之、豕人立而嘑、公懼墜_レ車、傷_レ足喪_レ屨。

劉向以爲、近_三豕禍_一也、先_レ是齊襄淫_三於妹_一、魯桓公夫人、使_三公子彭生殺_三威公_一、又殺_三彭生_一、以謝_三魯_一、公孫無知有_レ寵_三於先君_一、

襄公細之、無知帥怨恨之徒、攻襄於田所、襄匿其戸間、足見於戸下、遂殺之、傷足喪履、卒死於足、虜急之效也。(五行志中之下)

(甲) 左氏傳、魯莊公時有内蛇與外蛇、鬪於南門中、内蛇死。(莊公十四年文)

劉向以爲、近蛇孽也、先是鄭厲公劫相祭仲而遂見昭公、代立、後厲公出奔、昭公復入、死、弟子儀代立、厲公自外劫大夫傅瑕、使傅瑕子儀、此外蛇殺内蛇之象也、蛇死六年、而厲公立、莊公聞之、問申繻曰、猶有妖乎、對曰、人之所忌、其氣炎以取之、妖由人興也、人亡釁焉、妖不自作、人棄常、故有妖。(五行志下之上)

(乙) 左傳曰、僖公三十二年十二月己卯、晉文公卒、庚辰將殯于曲沃、出絳、柩有聲如牛。

劉向以爲、近鼓妖也、喪、凶事也、聲如牛、怒象也、將有急怒之謀、以生兵革之禍、是時秦穆公遣兵襲鄭、而不假道還晉、大夫先軫謂襄公曰、秦師過不假塗、請擊之、遂要峭阨、以敗秦師、匹馬筋輪、無反者、操之急矣、晉不惟舊而聽虐謀、結怨疆國、四被秦寇、禍流數世、凶惡之效也。(五行志中之下)

(丙) 左氏傳、文公十六年夏、有蛇自泉宮出、入于國、如先君之數。

劉向以爲、近蛇孽也、泉宮在國中、公母姜氏嘗居之、蛇從之出、象宮將不居也、詩曰、維虺維蛇、女子之祥、又蛇入國、國將有女變也、如先君之數者、公母將薨象也、秋公母薨、公惡之、乃毀泉臺、夫妖孽應行自見、非見而爲害也、文不改行循正、共御厥罰而非禮、以重其過、後二年薨、公子遂殺文之二子惡視、而立宣公、文公夫人大歸于齊。

(五行志下之上)

(甲) 左氏傳、魯襄公時、宋有生女子、赤而毛、棄之隄下、宋平公母其姬之御者、見而收之、因名曰棄、長而美好、納之平公、生子曰佐、後宋臣伊戾、讒太子痤而殺之、先是大夫華元出奔晉、華弱奔魯、華臣奔陳、華合比奔衛(襄公二十六年文)

(乙) 劉向以爲、時則火災、赤青之明應也(五行志中之下)

(丙) 左氏傳曰、昭公八年春、石言於晉、晉平公問於師曠、對曰、石不能言、神或馮焉云云。

(丁) 劉向以爲、石白色爲主、屬白祥。(五行志上)

(戊) 左氏傳、昭公十九年、龍鬪於鄭時門之外洧淵、劉向以爲、近龍孽也、鄭以小國、攝乎晉楚之間、重以疆與鄭、當其衝、不能修德、將鬪、三國以自危亡、是時子產任政、內惠於民、外善辭令、以交三國、鄭卒亡患、能以德消變之效也。(五行志中之上)

(己) 左氏傳、昭公二十一年春、周景王將鑄無厭鍾、泠州鳩曰、王其以心疾死乎云云。

(庚) 劉向以爲、是時景王好聽淫聲、適庶不明、思心霧亂、明年以心疾崩、近心腹之病、凶短之極者也。(五行志下之上)

(辛) 左氏傳曰、周景王時、大夫宓起見雄雞自斷其尾。(昭公二十二年文)

(壬) 劉向以爲、近雞禍也、是時王有愛子子鼂、王與宓起、陰謀欲立之、田于北山、將因兵衆殺適子之黨、未及而崩、三子爭國、王室大亂、其後宓起誅死、子黨奔楚而敗。(五行志中之上)

右の引用文に見える「左氏伝」の語は、劉向の書の原文ではなく、漢書の著書班固の筆に成るものであるかも知れないが、班固がこれらの説を左氏伝に関するものとして明記してゐるのは、恐らく劉向の書の原文に出所を然るべく明記する所があつたからであり、且つ右の劉向の諸説の内容が略ぼ左伝の記事を引用して述べてゐる所から見て、

劉向が左伝の災異について立説してゐると断定して誤りがないと思ふ。その証拠に、劉向が國語やその他の史書の災異について論ずる場合には、班固はその冒頭に「史記云云」と断つてゐる。この点から見ても、劉向の原文に出所の書名が明記されてゐたものと思はれる。しかして劉向が斯く左伝やその他の史書の災異を引用して立説してゐるのは、五行伝に説く妖孽等に応ずる事象が、春秋の經文や公毅の伝に見られなかつたからであらう。

上述の如く、劉向は左伝を読みそれを資料にしてゐることは、五行志の調査に依つて明かになつた。従つて、説苑や新序等の書に多く見られる左伝と同一の記事やそれに関する所説が、章炳麟のいふが如く左伝に従ふものであると断定して差支ないと思はれるが、特に彼が左伝に精通してゐたことを物語るものとして列女伝がある。今日伝はる所の列女伝は悉くは劉向の原文でないとしても、その全体に通ずる一つの顯著な特色として、きまつて文末に加へられてゐる「君子曰」とか「君子謂」の論評を指摘することができる。この君子の論評を以て劉向の作と見るならば論外であるが、これを以て劉向の原文を伝へるものとせば、これは実に劉向が左伝に精通し、その筆法に倣ふものといふべきである。左伝の君子曰については、既に「史記と左伝について」(諸稱博士古稱祝)に於て論究したが、左伝は事件の記述の後に「君子曰」の形を以て人物の是非を論評し、しかもその後には詩や書を引用することが多い。然るに列女伝も亦必ず君子の評論を加へ、その後には詩を引用することが定型となつてゐる。これは必ずや左伝の筆法に倣ふものである。その証拠に説苑の君道篇に、左伝莊公十一年の宋大水の一条を引用して、左伝の「臧文仲曰」の臧文仲を君子に改めてゐるのは、劉向が左伝の特色たる君子の評論を用ひたものである。これらの事から推定して、劉向が左伝に精通してゐたと見るべきであり、論衡の案書篇に「劉子政玩弄左氏、童僕妻子、皆呻吟之」と述べて

ゐるのは、一面の眞実を物語る伝承であるやうに思はれる。

五

劉向が左伝に精通してゐたとしても、左伝を以ていかなる性格のものとして考へてゐたかは、更に追求すべき問題である。既に述べた如く、劉向が公羊・穀梁の二伝を引用する場合には「春秋云云」の語を用ひることが多いが、左伝を引用することは公・毅に比して遙かに多にも拘はらず「春秋云云」の語が更に見当らない。これは彼が公羊・穀梁を以て春秋の精神を伝へる正統派と考へ、左伝を以て然らざるものと考へたことを立証するものであるが、資料としての左伝の価値を重視したことは、次の一例に依つても知ることが出来る。

曹公喜時、字子臧、曹宣公子也、宣公與諸侯伐秦、卒于師、曹人使子臧迎喪、使公子負芻與太子留守、負芻殺太子而自立、子臧見負芻之當主也、宣公葬、子臧將亡、國人皆從之、負芻立、是爲曹成公、成公懼告罪、且請子臧、子臧乃反、成公遂爲君、其後晉侯會諸侯、執曹成公、歸之京師、將見子臧於周天子、而立之、子臧曰、前記有之、聖達節次守節、下不失節、爲君非吾節也、雖不能聖、敢失守乎、遂亡奔宋、曹人數請、晉侯謂、子臧反國、吾歸兩君、於是子臧反國、晉乃言天子、歸成公於曹、子臧遂以國致成公、成公爲君、子臧不出、曹國乃安、子臧讓千乘之國、可謂賢矣、故春秋賢而褒其後。

(新序節士)

右の文は、明かに左伝の成公十三年・十五年・十六年の文を引用したものであり、最後の「春秋云云」の文は、公羊の昭公二十年の夏曹公孫會自鄆出奔宋の伝文の義に従つたものである。公羊伝は

奔宋有言自者、此其言自何、畔也、畔則曷爲不言其畔、爲公子喜時之後諱也、春秋爲賢者諱、何賢乎公子喜時、讓國也、其讓國奈何、曹伯廬卒于師、則未知公子喜時從與、公子負芻從

與、或爲主乎國、或爲主乎師、公子喜時見公子負芻之當主也、逡巡而退、賢公子喜時、則曷爲爲會諱、君子之善善也長、惡惡也短、惡惡止其身、善善及子孫、賢者子孫、故君子爲之諱也。

と、説くも、史実は左伝の詳細なるに及ばない。劉向が公羊伝を以て春秋の精神と認めながらも、公羊伝の説く史実を用ひずに左伝の史実を用ひてゐるのは、資料としては左伝が公羊に優ることを認めたに外ならない。このことはやがて、確實なる史実の上から春秋を説く左伝を以て春秋の正統とする左伝家劉歆を生み出す素地をなすものである。劉歆が父の向と論争して左伝の公穀に優ることを主張したことは、既に論じた通りであるが、彼の論鋒の骨子は、左伝を以て孔子に親見した左丘明の作とし、公・穀の二伝を以て七十子後学の伝聞に成るものと主張し、親見の書の確實なる資料を以て、根拠に乏しい伝聞の口説を非難したものである。即ち資料的実証主義を以て主観的独断論を排撃したものと云ふべきである。劉向がこれを非難することができなかつたといふのは、実は劉向の学問の中に、既に斯かる傾向の萌芽が培かはれてゐたからである。しかしてこの萌芽が若き劉歆の中にすくすくと成長し、遂に子を以て父を撃つといふ結果を招いたものであるまいか。即ち劉向における相背反した二つの性格の闘争ともいふべく、前に、劉歆は父の新しい性格を以て、父の古い性格を攻撃したものでないかと言つたのは、まさにこのことを意味する。

六

劉向の死後、劉歆は数々の輝かしい業績をあげた。曰く七略の完成。曰く古文学の表章と立学、わけても左伝の表章。曰く三統曆の製作。しかしてこれらに一貫するものは資料による実証主義と科学的な合理主義とであつた。劉歆が出て漢の経学は一変し、古文学が隆盛となり、幾多の名儒が輩出して着実なる学問研究が行はれ、遂に鄭玄に

よつて大成されるに至つたが、この古文学の源を培かつたものは劉歆その人といふべく、更にその根源はその父劉向に求められなければならない。(漢書の律歴志に、劉向が六歴を論じて五紀論を作り、劉歆がその微影を究めて三統曆を作つたとある。歴法に於ても、劉歆は父の学問を繼いだのである。)

劉向は代々今文魯詩を奉ずる家に生れ、今文学全盛の時代に際会して公羊・穀梁の二伝を学び、特に公羊学に精通し、二伝の義を以て春秋の真精神を伝へるものと確信した今文学の大家であつたが、秘府の典籍を見、古来の豊富な資料に接することのできた彼は、その豊富な資料によつて、合理的に客観的に実証しようとする学风を持つに至つた。まさに今文学より古文学の性格への一大転回であつて、洪範五行伝論と言ひ、説苑・新序・列女伝といふ著書も、すべてこの秘府の典籍を資料として作られたものである。

このことから更に想像を逞しくするならば、漢書芸文志にいふ新国語五十四篇も「劉向分三國語」といふ班固の注を信憑する限り、劉向が旧来の国語二十一篇を、説苑などに見る如く、幾つかの綱目に分類すると共に、それに他の典籍からの資料を豊富に加へて内容を充実したものであるまいか。新国語といふ名称と五十四篇といふ篇数、並びに秘府の典籍を縦覧することのできた劉向の立場とから考へて、右の如く想定することは不可能であらうか。ただ新国語五十四篇は夙に衆訟の存する所である。実証のない臆断は、実証を尊んだ劉向の学問を冒瀆することとなるから、一個の想定として附加する程度にとどめる。

要するに、劉向から劉歆への展開は決して偶然なことではなかつた。今文学家としての劉向の学問の中には、既に古文学家として展開する劉歆の古文学的性格が既に胚胎してゐたものであつて、この意味に於て劉向の学問を重要視するものである。(昭和二九、五、一三二)